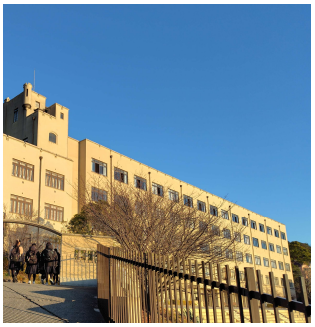
令和８年１月２６日　*vol. 42*

「理想の自分」

県立神戸高等学校長
新谷　浩一



○　冬が訪れてから気づいたこと

朝の通勤時、地獄坂から見上げると青空の下に私達の校舎は聳えています。それは趣があり、心惹かれる風景です。それでも冬の訪れとともに気付いたことがあります。４階の教室の窓がすべて開いているのです。気になってお聞きすると、榎本先生が毎朝開けてくださっているとのこと。風通しの良い、清涼な空間を創ろうという心配りですね。

「自分にもできること」にこだわりながら、最近の私は生きています。だから余計に榎本先生のさりげない振る舞いが心に残ったのかもしれません。そうそう、３学期の始業式の式辞で話した私と叔父との話も「自分にもできること」のひとつです。子どもがいないためかもしれませんが、叔父夫婦は昔から私をとても可愛がってくれました。その叔父が昨年に奥さんを亡くし、１人でクリスマスを迎えると聞いたので、叔母を偲ぶ時間をともにしたのです。いわば叔父叔母孝行ですかね。

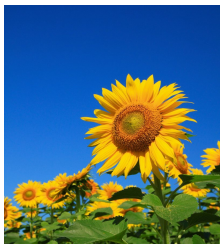
それにしても穏やかな１月でした。おそらく終業式の余韻のせいです。生徒の皆さんは実にいい表情で私の話を聴いてくれましたし、あの日の校歌は私がこれまで聴いたことのないような響き方で講堂を揺るがせました。ピアノ伴奏の能島先生も「こんなに歌ってくれたのは初めてですよ」って驚いていましたからね。そうそう、あの日の私は画像をスクリーンいっぱいに貼り付け、こんな話をさせてもらいました。

薔薇は向日葵になれないし、向日葵は薔薇になれない

～　A rose can never be a sunflower, and a sunflower can never be a rose.
これはオーストラリア出身のファッションモデル、ミランダ・カーの言葉です。日本語に訳すと、「バラは決してひまわりになれないし、ひまわりは決してバラになれない。すべての花はそれぞれで美しい」となります。

憧れの存在ってありますよね。でも、その通りになるのは難しいことです。バラはバラだし、ひまわりはひまわりでしかありません。だからこそ、それぞれが持っているものを意識して、それを活かして勝負しないといけないのかなと思っています。誰かの見よう見まねでは、本物にはなれないということですね。

ちなみに「わがまま放題の先生」だった僕が少し変わったのは先輩に叱られた 30 歳のときです。「しっかりしろ、あんたは桜なんだから」そう言われました。開花を待ち焦がれられ、散るのを惜しまれる。それが桜だそうです。「良くも悪くも、あんたは周りの人間が気になってしまう目立つ存在や。だから、調子がいいからっていい気になったり、わるい時には不機嫌な顔をしたり拗ねたり、そんな素振りを生徒に見せるな。生徒がそんな姿を正しい大人の姿と勘違いしたら、どうする。そう伝えるのがあんたのしたいことか」と。



これが結構こたえたんです。それで、それからは僕も人前でどのように振る舞うべきか考えるようになりました。さぁ、自分らしさって何処にあるんだろう、そんなことを考えてくれたら嬉しいなって思います。自分の良さは何処にあるんだろうって。
例えば山で見る杉は凄いですね。まっすぐまっすぐ上へと伸びている。とても美しい姿です。あんな自分であれば嬉しいけど、どうも自分には難しそうです。だからどうせ桜なら、醜い桜にはならないように生きればいいのかなって今は思っています。

いつだって比べるべき相手は隣の誰かさんではありません。理想の自分です。その差を埋めることにこそ、若いうちに手をつけましょうか、ということをお願いして僕からの話とします。それではよいお年を。

78 回生は今、悩み多き時期ですか。でも、前に伝えましたね。「積み重ねてきた過去と果たすべき未来を君が解っていればそれでいい」と。理想の自分を見失わなければ道は拓けていくと、私は信じているのです。